

ロシア東洋学の歩みによせて

ヴァジム・ユリエヴィッチ・クリモフ (В.Ю.Климов)

この報告の目的は、ロシア、特にサンクト・ペテルブルグにおける東洋学発生の歴史、アジア博物館の創設、東洋学研究所の創設と発展、サンクト・ペテルブルグでの日本研究の過去・現在・将来について話すことである。

一 ロシア東洋学発生の歴史

ロシアの地理的位置はユニークである。ロシアはヨーロッパであり同時にアジアでもある。太古よりアジア大陸に住んでいた諸民族と接触があった。モスクワ大公国の時には、中央機関で勤める東洋外国語の通訳がいた。しかし、その当時には通訳を育成する特別な学校は存在しなかった。

実用的東洋学はピョートル一世の改革時、十八世紀初めに出現した。外交関係・交易・国境警備の分野において、東洋諸国の言語と習慣知識に対する多大な要求が発生した。ピョートル一世の諸勅令により、東洋諸言語の定期的研究が開始した。一七〇〇年六月一八日に二・三人の若者に中国語とモンゴル語を教えるべしとの最初の勅令が発せられた。一七〇五年一〇月一六日には、漂流民伝兵衛が四・五人の子供達に日本語を教えるようにとの勅令も発せられた。ついで一七一六年一月一八日には、ベルシャ語を勉強させるため、モスクワ学校でラテン語を習った

若者を五人ベルシャに出張させるようにとのロシア帝国元老院法令が発せられた。ピョートル一世の命令により、一七二四年八月二三日、トルコ語を勉強するため、ツァーリグラード(コンスタンチノープルの別称)に若者を数年間出張させるようにとの元老院法令が発せられた。ピョートル一世は自ら、ロシア帝国の領土に住む東洋人民の過去に大きな関心を示した。彼の時代にロシアでは始めてアラビア語の出版社が創設された。また一七〇三年にはモスクワに東洋学校が創設され、シベリアも探検されるようになった。

一七二四年一月二八日、ピョートル一世の死去直前には、勅令により科学アカデミーが創立された。また後にアジア博物館の創立に大きな役割を果たす科学アカデミー図書館と珍品・美術品の収集保管所(Книжарница)も設立された。一七三一年に東洋言語の通訳であったケール(Г.Кейер)は、サンクト・ペテルブルグに招待され、外務省通訳となり、六人の生徒の教師となった。彼は東洋学アカデミーの創設案を提出した。そのアイデアは有名なロシアの学者ロモノソフ(М.В.Ломоносов)に支持されたが、草案は学界と政府に支持されなかった。一八〇三年、科学アカデミーの新しい規定により、東洋学者クラプロト(Г.О.Кларпфорт)(一七八三—一八三五)がロシアに招待された。一八一〇年、彼はロシア科学アカデミーの歴史の中で始めて東洋学論文集“Archiv für asiastis-

the Literatur, Geschichte und Sprachwissenschaft", Bd. I, St.-Pbg., 一八一〇を刊行した。特に彼は中国語テキストを翻訳した。一八〇四年にはロシア大学共通規則が採択され、学生はこの規則に従い、カリキュラムにもとづき東洋学を学習するようになった。十九世紀に入ると、ロシアの対外政策においては、いわゆる東洋問題が焦眉の急となってきた。当時の科学アカデミー会長である伯爵ウヴァロフ(С.С. Уваров)は東洋学アカデミー創設の提案をおこなった。ゲーテ(一七四九—一八三二)は批評を書くべく、この提案を渡された。ナポレオンはこの提案に注意を向け、フランス東洋学者ラングレ(一七三六—一八二四)の意見を求めた。

二 アジア博物館の歴史

ウヴァロフのためまぬ努力により、一八一八年、サンクト・ペテルブルグ教育大学にアラビア語学科とペルシャ語学科が新設され、同年一月一日に、二十世紀三十年代に東洋学研究所に変わるだろうアジア博物館が創設された。初代館長になったのはフレン(Христиан Данилович Френ)である。彼の努力により、アジア博物館は写本・雑貨・書籍・木版プリントの保管所だけではなく、写本を研究し刊行する科学的なセンターとなった。一八三六年には、新科学アカデミー規定により、始めて東洋学は科学・学問分野の一つとみなされるようになった。

アジア博物館はその創設時に、ピョートル一世が創立した珍品・美術品収集保管所とМузей Petropolitannu から、アジア写本及び既に一七七六年バクメーステル(Bakmeister)がその内容を記述したことがあった硬貨コレクションをうけいれた。または皇帝・伯爵ウヴァロフ・外国東洋学者・ロシア東洋学者からの寄付物品を受領した。のちには国は必要な文献と写本を購入するための資金を提供した。残念ながら日本コ

レクションはきわめて乏しいものであった。一八七四年から博物館は毎年六〇〇ルーブル、一八九四年から一〇〇〇ルーブル、一八九九年から三八〇〇ルーブル、一九一二年からは五〇〇〇ルーブルを受けとった。

十九世紀後半に入ると、ロシアならびにサンクト・ペテルブルグの東洋学は発展の新しい刺激を受けた。一八五五年にサンクト・ペテルブルグ大学には東洋言語学部が新設された。この学部の教員と科学アカデミーの学者との緊密な結びつきが実現された。教員達は研究を行い、同時に科学アカデミーの東洋学者は学部において勉強している学生達を教えた。一八五五年には、科学アカデミー会員ローゼン(B.P. Rosen)がロシア考古学会東部の部長に選出され、その後、最初のロシア語東洋学雑誌『紀要』("Замечки")が刊行されるようになった。

ロシアにおいては、二〇世紀初頭まで科学的東洋学は人文・社会科学の集合体(歴史、言語学、文学研究、哲学、または考古学、碑銘学、民俗誌学などの集合体)として形成された。従って、この学問分野のロシア学者は東洋学万能技術者でもあった。一九一六年三月一日現在、アジア博物館には七名の研究者が勤めていた。一九一七年一〇月革命の後に教育改革が行われた。新大学も新設された。一九一八年には、ラーザレヴという名称を有していたモスクワの大学が、科学アカデミー会員マー(Н.Я. Марр)の指導下、近東アジア大学となった。後に、この大学はモスクワ東洋学研究所となった。ペトログラード(現在のサンクト・ペテルブルグ)の科学アカデミーの東洋学者と大学東洋言語学部の東洋学者は、参謀本部アカデミー東洋学科(モスクワ)の新設と、東洋学アカデミー(タシケント)、タシケント大学文学部東洋学科の新設に参加した。他方、ペトログラードにも、モスクワにも東洋言語大学が創設された。同時に東洋勤労者共産党大学(С.П.Д)も創設された。一九二〇年一〇月二〇日には政府の決議によりペトログラードに中央現用東洋言語

大学が開かれた。最初の大学学長になったのは、アジア博物館の研究者コトヴィチ(В.А.Котвич)であった。またはこの大学において、きわめて優れた諸学者、即ちアジア博物館の研究者のアレクセーエフ(Алексеев)、ウラジミールツェフ(Владимирцев)、クラチコフスキー(Кривошский)、オルデンブルグ(Ольденбург)、ロマスケヴィチ(Ромаскевич)、サモイロヴィチ(Самойлович)、フレイマン(Фрейман)、のちにはバランニコフ(Баранников)、ベルテリス(Бертельс)、コンラッド(Конрад)、ユ・ブル(Ю.Бур)、ツビヤンスキー(Тубянский)、シシルバツコイ(Шибельский)等の学者が働いた。アジア博物館付属として東洋学者協会が創設され、一九二二年五月一日に第一回会議が開催された。この協会はアジア博物館に基礎をおいたレニングラード東洋学研究所が新設される時まで存在した。一九二四年にアジア博物館は科学アカデミー図書館に移転した。科学アカデミー二百周年記念日を祝う一九二五年には、アジア博物館に十八名の研究者が働き、内六人は直接に極東の国々を研究した。一九二七年に科学アカデミー付属に二つの東洋学施設が新設された。即ち仏教文化研究所(Институт буддийской культуры ИББУ) (一九二八年五月五日にシシルバツコイが所長に任命され、研究所は一九二八年一〇月一日に開設された)とトルコ諸民族言語・文化研究室(Туркологический кабинет, ТУРК) (科学アカデミー会員のバルトリド(В. Бартольд)が室長に任命された)の二施設である。

三 東洋学研究所の歴史

一九二九年はソ連科学アカデミーにとって転機の年となった。この年には新しい規定が採択され、マルクス主義者を正会員に選出し、帝政ロシアの残存物をとりのぞく宣言がおこなわれた。この年、正会員オリデンブルグ(С.Ф.Ольденбург)は、全研究者を一つの施設に集約する提案を

おこなった。しかし、この時には、このアイデアは支持されなかった。しかし、一九三〇年には科学アカデミーの付属の総ての東洋学施設が、アジア博物館を基礎として創立された東洋学研究所に入った。アジア博物館の百十二年目に、博物館は研究所と名付けられたのである。アジア博物館の硬貨と考古学コレクションはエルミタージュ博物館に移管された。一九一七年から次のような二つの東洋学研究所の優先順位がつけられた。

一、古代・中世を主とする古典的東洋学研究を継続すること

二、重点を現在の東洋諸国の政治・経済問題におくこと
二つ目の目標は新国家の課題と関連した。またソ連邦内の東洋諸共和国と自治諸共和国の物質精神文化、新アルファベットと用語の問題に對し多くの注意が払われた。

一九三〇年から、東洋学者が集まった東洋学研究所が新設されてから、研究テーマの計画化が始まった。その時の研究テーマの優先性は、マルクス・レーニン主義の階級闘争理論に基づいた近現在東洋諸国の歴史・経済、民族解放運動及び古代からの市民の歴史である。一九三〇年に政府はソ連の社会主義建設とソ連科学アカデミーの新規定を一致して承認した。

十六回共産党大会後、『新東方』という東洋学雑誌に「全ソ連マルクス主義東洋学者協会の宣言」が発表された。宣言の前には、『新東方』という雑誌の出版を止め、「戦闘的な東洋学新協会の機関誌」を出版し始めるというデイマンシテイン(С.Диманштейн)の論文が発表された。この論文には、マルクス・レーニン主義的東洋学はブルジョア東洋学と決定的な戦いを始めなければ成らないということが声明されていた。共産党アカデミーレニングラード支部の付属に、マルクス主義東洋学者協会(Общество марксистов-востоковедов, ОМВ)新設されたが、東洋学研究所にはその

細胞が出来た。階級闘争の激化が声明された。このようにして一九三〇年にソ連科学アカデミー東洋学の組織の時期が終わったが、大祖国戦争の開始までに純粹な人文科学から人文科学的要素を残した社会科学へ複雑な変化過程が進んだ。一九三一年から東洋学研究所には弁証法的唯物論と政治経済学のゼミナールが行われるようになった。一九三三年から東洋学研究所には日本研究者協会とモンゴル研究者協会が出来、アラビア研究者協会と中国研究者協会は創設中であつた。一九三四年に研究所写本部には四万の写本が残っていて、写本部の研究者は写本と古文書館の資料の計画的な整理を始めた。研究所の図書館には二十万冊の本があつた。一九三七年には研究所の数人の研究者が逮捕され、射殺された。

日本研究者ネフスキイ(H.A.Невский)も一九三七年一〇月四日に逮捕され、四日後には同人の妻も逮捕され、二人とも一九三七年一月二四日に射殺された。大祖国戦争直前の一九四一年一月一日現在、東洋学研究者の人数は七十七名であり、管理者と付添人の人数は十名であり、大学院生は三十三人であつた。

第二次世界大戦の時の一九四二年一月一日から四月一五日まで六十名の研究者と二十七名の大学院生がいなくなった。図書館の係員は破壊された家で、いなくなった研究者と疎開した研究者の本を探しに行つて集めた。一九四二年六月に研究所研究者の疎開活動が始まり、一九四二年末にはレニングラードに五名しか残らなかつた。一九四五年五月一七日に研究所はタシケントから戻つた。一九四五年に、既に一九四一年に製版された『ソビエト東洋学』という論文集の第三巻が刊行された。一九四六年の終わりに、モスクワにいる研究者を十一人含んでの研究所の学者数は九十七名であつた。一九五〇年に東洋学研究所はレニングラードからモスクワに移転したが、レニングラードには東方写本部(博物館)が残り、二十七名の研究者と十六名の管理人・付添人・司書のスタッフ

がいた。一九五一年から一九五六年まで研究者は主として写本目録を作成し、写本の解題をおこない、それを研究した。この活動の結果、写本は科学的に使用されはじめた。一九五六年一〇月二六日に東方写本部は東洋学研究所レニングラード支部に変わり、オルベリ(M.A.Орбери)が支部長に任命された。東洋学研究所指導部の発意により東洋学文献という出版社が新設され、研究論文の発行部は非常に増加していった。オルベリは一九五六年から一九六〇年まで四年間にわたり、レニングラード支部にレニングラード大学東洋学部の若い卒業生を百人も受け入れた。彼は研究所支部長でありながら同時にレニングラード大学東洋学部長でもあつた。一九五八年から研究所の国際関係は発展しはじめ、同年七月二四日、研究所には国際関係委員会が創設された。東方人民の古文書と文献の科学的な研究、解題、科学的な記述ということは研究所の主な基調として残り、また前資本主義時代の社会・経済的發展段階の發展と交代の特徴の研究、東方における階級社会の發生の研究、東洋諸国における文學發展の法則性と特徴の研究、東方文化の研究、特に東方宗教歴史と思想の研究も發展させられていった。モスクワに移転してからの「ソ連科学アカデミーアジア人民研究所」という名前は、一九六八年六月一四日に昔の「ソ連科学アカデミー東洋学研究所」という名前に戻された。ソ連邦の最後の時期にレニングラードは改称され、サンクト・ペテルブルグという第一次世界大戦前の名称が復活し、ソ連邦が解体してからは東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部はロシア共和国の所屬となつた。

四 東洋学研究所の古文書と資料

現在、サンクト・ペテルブルグ研究所の古文書部の写本と木版のプリント数は十万に達する。中国と朝鮮の古文書と古書(старая книга)は次

のまとまりからなっている。

1. 十八世紀と十九世紀に初期のロシア人中国研究者によって集められた古いコレクション (ラジジェンスキイ (Радзженский)・ラズンヒン (Разохин)・ビチュリン (Бичурин)・レオンチェフスキイ (Леонтьевский) とした中国研究者)

2. 旧外務省アジア局の図書館からの移管蔵書

3. 一八九〇年から一九一〇年まで偶然的に寄贈された様々なコレクション

4. アジア博物館のために意図的に集められたコレクション。二十世紀初期 (一九〇八―一九〇九) にロシアのコズロフ (П.К.Козлов) 探検隊がハラホト (黒水城) からサンクト・ペテルブルグへ持ってきたものである。このコレクションに基づいて、クチャーノフ所長、京大の西田龍雄と庄垣内正弘によって西夏語仏典目録 (Каталог тибетских буддийских памятников института востоковедения Российской Академии наук) が一九九九年に京都で刊行された。

それほど多くない朝鮮の蔵書は朝鮮駐在ロシア領事ドミトリエフスキイ (Дмитриевский) の集めたコレクションとイギリス外交官アストン (Астон) のコレクションからなっている。

最初の日本の本は一七九一年と一七九五年にエカテリナ二世が寄贈した本のコレクションである。このコレクションには写本もあった。このコレクションは主に日本の都市見取り図とオランダの本の翻訳からなっている。一八四〇年に正会員ブロッセ (Броссе) は中国語の本と日本語の本の目録を作成した。(Bulletin Scientifique, 1841, t. VIII, №15, p. 223-240)。一八三〇年に男爵シリング (Шиллинг) から購入した日本アイヌ辞典、日本地図、都市見取り図がこの目録の中で触れられた。総ての地図と見取り図は十八世紀のものであった。一七九八年、アジア博物館

が開かれる二十年前に "Catalogus librorum Sinicorum, Japonicorum nec non Mongolicorum Tibetanicorumque in Academiae imp. Petropolitanae Bibliotheca qui asservantur" という目録が作成された。また一八一八年にカメンスキイ (П.Каменский) とリプツォフ (С.Липцов) が日本の本と中国の本の "Каталог китайским и японским книгам в библиотеке Императорской Академии, хранящимся по преподучению Г-на пре-зидента С.С.Уварова, вновь следанный П.Каменским и С.Липцовыми. 1818г." という目録を作成した。彼等は二人とも外務省の中国語通訳であったから、日本写本と木版プリントの目録を作成する中で間違いを犯した。目録に入ったある写本またはプリントには間違った解題がある。アジア博物館が開かれた時には、日本研究者は一人もいなかった。一八二九―三〇年にアジア博物館に中国と日本の三五二の硬貨と日本の物が六八保管され、一八六一年に二九五九の中国と日本の硬貨が保管され、一八六八年に二九六九の硬貨が保管され、一八七七年に二九八三の硬貨が保管された。アジア博物館はこの陳列品を集めるばかりであり、誰もこれらを研究しなかった。一八四九年から一八六四年まで、カフカス地域研究者アカデミー正会員ブロッセ (М.Ф.Броссе) は極東から来た陳列品を含んで総ての陳列品と資料を登録した。一九世紀終わりから二〇世紀初めまでアジア博物館にあった日本の写本と木版プリントと刊行物を処理し始めたのは中国研究者である。一九一七年にアジア博物館に入り最初の日本研究者になったのはエリサーエフ (С.Г.Елисеен) である。彼はベルリン大学 (一九〇七―一九〇八) の卒業生であり、東大の学生 (一九〇八―一九一三) 大学院生 (一九二二―一九二四) であり、ペトログラード大学の助教となった。一八九九年にアジア博物館はポシエツト (К.И.Посел) の日本の本の小さなコレクション (日本地図や日本軍隊の歴史の本やその他) を購入した。一九一〇年に博物館は亡くなったゴシケヴィ

チ (Г.А.Полиевич) の日本の本のコレクションをゴシケウイチの親戚から購入した。二〇世紀の六〇年代に、北斎の版画が東洋学研究所レニングラード支部によって買われた。一九五八年から一〇年間にわたってペトロヴァ (О.И.Петрова) とゴングリヤド (В.И.Гонгрия) は計画的に東洋学研究所レニングラード支部に保管する古文書を科学的に記述し、解題してきた。総ての解題は六分冊に分かれてあり、第一分冊、第三分冊、第四分冊はペトロヴァとゴングリヤドが準備し、第二分冊の準備にはペトロヴァ、ゴングリヤドと共にイヴァノヴァ (Г.И.Иванова) も参加した。ゴングリヤドは第五分冊の解題を準備した。ゴングリヤドとハニン (З.И.Ханин) は第六分冊の解題を準備した。最後の第六分冊は一九七一年に刊行された。「日本写本、木版プリントと古版の本の解題」(Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг) の発行部数はとても少なく、七〇〇部しか出されなかった。この解題のお陰で、サンクト・ペテルブルグの東洋学研究所に保管する総ての日本の古文書について簡単な情報が得られる。一九五七年からゴングリヤドは「環海異聞」という写本を研究しはじめた。一九九七年に彼は「The Manuscript of *Kanhai Jinn* in the Collection of the St.Petersburg Branch of Oriental Studies」の論文を「Manuscripta Orientalia. International Journal for Oriental Manuscript Research」(Vol.3 No.2 June 1997, p. 58-68.) という雑誌に発表した。

アジア博物館の創設時から、館長はロシア東洋学者だけではなく、外国の専門家にも博物館の資料を研究するために貸出することをおこなった。この伝統は今も続いている。研究所は外国へマイクロフィルムを送り、外国研究者と一緒に共同研究を行い、研究所に保管する古文書目録を共同して刊行している。

五 東洋学研究所の有名な学者

アジア博物館の最初の日本研究者はエリセーエフであった。彼の主な研究テーマは松尾芭蕉の作品であった。彼の書いた日本文学史概説は一九二〇年に刊行された。一九一八年にもう一人の日本研究者ローゼンベルグ (О.О.Розенберг, 一八九三—一九一九) がアジア博物館に入った。

彼は四年間日本におり、帰国したのち、仏教について実りある研究を行った。その後数年間にわたりアジア博物館では日本学者は誰も働いてはいなかった。日本研究図書館の担当者は当時優れた中国研究者であったアレクセーエフ (В.М.Алексеев) であった。ネフスキー (И.А.Невский, 一八九三—一九三七) とコンラッド (Н.И.Конрад, 一八九一—一九七〇) は、一九三〇年から研究所の研究者となった。ネフスキーは西夏研究に夢中になり、また日本研究所の様々なテーマを追究した。一九三二年一月三十一日に、のちに科学アカデミー正会員となるシュコーフ (Е.М.Сукочев) が大学院生課程が終わって研究所に入った。

ラドウリザトウロフスキー (С.Е.Радиль-Зарубовский)、グルスキーナ (А.Е.Гускина)、ホロドヴィッチ (А.А.Холодович)、コリドネルグ (Д.И.Кольдер)、ジュス (Е.М.Линь)、コルパクチ (Е.М.Компачи) (一九〇一—一九五二)、ペトロヴァ (О.И.Петрова) などが働いた。一九四六年の末から、「室町時代(一五世紀)の日本の狂言」というテーマで大学院生のログノヴァ (В.В.Логнова) が研究を開始した。またゴングリヤド (В.И.Гонгрия) が活動した。一九五八年、ペトロヴァは研究所図書館に保管されていたアンドレイ・タタリノフの露日辞書(一七八二年編纂)の研究に着手した。それは日本の歴史的言語学の観点から見てきわめて興味深いものである。ニコラエヴァ (О.С.Николаева) は一九五八年に「第一次世界大戦(一九一四—一九一八)期の日本」という仕事をしたが、その

後一九五九年からは徳川時代の五人組文書の翻訳と研究にとりくんだ。またイヴァノヴァ (I. Ivanova) は一九四九年にレニングラード大学を卒業、一九五三年に研究所大学院を終了、一九六〇年にはハニン (S. I. Xanin) が終了している。ボロジェフ (M. B. Borod'ev) は一九五〇年にレニングラード大学を卒業しているが、彼のテーマは「日本の国家と文化の起源」である。ペトロヴァのタタリノフ辞書についての報告は一九六〇年のMKB (『東洋学者国際会議』) 二五号に発表され、辞書そのものは同人の前文をつけて一九六二年に出版された。ニコライ・レザノフの日本語辞書についての報告は一九六三年MKB二六号のためにペトロヴァによって準備された(辞書の出版準備に関する作業は一九六七年に完了した)。一九六七年からペトロヴァは、一八世紀ペテルブルグにおいて日本語に翻訳されたコメンスキー (S. A. Komerckii) の "Orbis sensualium pictus" の方言学的研究にとりかかった。

(二〇〇〇年三月九日報告の翻訳、訳者は宮地正人)